世界のフラワーショウとガーデンデザイン

二宮 孝嗣(本学非常勤講師・セイセイナーセリー)

かれこれ20年以上世界のあちらこちらのフラワー＆ガーデンショウを見たり参加したりしてきたが、ここ5年ほど特に感じてきているのは海外では日本庭園の影響、日本では洋風庭園、特にイングリッシュガーデンの影響である。

そもそも世界には大きく言ってふたつの庭の流れしかなく、ひとつは勿論日本庭園であり、もうひとつは今イングリッシュガーデンを最終到達点とする洋風庭園であると考えている。

日本庭園のルーツは、私は中国から伝来した左右対称の寺院の伽藍配置を崩しはじめる頃から日本人独自のバランス感覚のもとでの美が生まれて来たような気がする。具体的には奈良時代に建立された法隆寺や唐招提寺からは日本人独自のバランス感覚を見い出すのは難しく、私は宇治の平等院の前庭から左右対称を崩す日本人独特のバランス感覚の流れが始まったのではないかと思っている。その後文化の中心が京都に移り多くの名園が作られ、桂離宮を頂点に世界に類を見ない程完成された庭園文化になって行く。他方では禅仏教の影響で自然(宇宙)への接点としての瞑想の場として庭園が作られ始め、心動かすもの(植物等)を次々と排除してゆき、妙心寺東海庵を頂点とする枯れ山水が多く作られ、庭園が精神哲学にまで高められていった。

世界のもう一方の流れ、現在のいわゆるイングリッシュガーデンを最終到達点とするヨーロッパでの庭園の流れは、古くはバビロンの空中庭園(いまで言う屋上緑化)から始まると言われているが、はっきりとした庭園という形式をとってくるのはイタリアルネッサンスまで待たなければいけ

ないと思う。ルネッサンス時代多くのヴィラ（郊外の別荘）が各都市郊外に造られ、特にローマ周辺や避暑地としての北イタリア湖水地方に数多くの名園が作られ、今でもその面影を見ることができる。特に北イタリア湖水地方には当時のままの庭園がいくつも残っており、そこに現在のイングリッシュガーデンの原点を感じることができる。ヨーロッパはその後一時イスラム文化が経済、文化の中心であった地中海沿岸を支配し、その影響を強く受けたスペインのアルハンブラ宮殿に完成された庭園を現在にまでその美しい姿を見ることができる。その後富と文化の中心がフランスに移り、庭園文化もそれに伴ってベルサイユ宮殿に代表される広大なフランス庭園へと移り変わって行く。フランス王朝の衰退と産業革命により富と文化の中心がイギリスに移り、一人の天才造園家ケイパビリティー・ブラウンによって現在のイングリシュガーデンの姿が形造られ､現在にいたっている。

図1　villa Sorbollon'

このようにそれぞれお互いの長い歴史の間、両者の庭園文化には交流があったとは思えず、それぞれ独自の道を歩み、全く違う形で庭園文化を発展させてきたと思われる。しかしそれぞれの庭園文化の目指す根底を流れる基本思想は、人と宇宙（いわゆる佛教観で言う）との接点であり、憧れの地、ユートピア思想であるわけで、それぞれアプローチの仕方は違っていても最終目的は自然と人との調和、融合を目指しているのではないかと感じている。

このようにそれぞれ違った形の庭園文化がここ10年来、非常な勢いで影響しあい混じりあってきている。日本では御存じのようにイングリッシュ

ガーデンブームであり、ヨーロッパやアメリカ、オセアニアでは日本庭園ブームが沸き起こっている。これは世界中で開かれているガーデンショウにもその傾向が強く現れてきて、海外で開かれているどこのガーデンショウに行っても和のテ－ストが入ってきている庭や日本庭園そのものが多く見られるようになってきた。世界のリーディングガーデンショウで毎年イギリス、ロンドンで開かれる100年以上の歴史を持つチェルシーフラワーショウでも1996年には私が造ったホンダティーガーデンがゴールドメダルを受賞し、その後いくつもの日本庭園が受賞、昨年のチェルシーフラワーショウでも現地の日本庭園協会(Japanese Garden Society)の日本庭園がゴールドメダルを取った。このように世界の多くのガーデンデザイナーの目が日本に向いてきており、日本の造園技術の修得に躍起になってきている。

私はこの和と洋のふたつの庭園技法の根本的な違いは、一言で言ってしまえば、和のメンタル性、西洋のビジュアル性の違いではないかと思っている。お互い両極まで辿り着いた観のあるふたつのタイプの庭園様式が、今急激に影響しあい両の要素を取り入れながらその方向性をそれぞれ見い出そうとしているように思える。日本にあっては洋の要素を取り入れた和風庭園、イギリスにあっては和の要素を取り入れたイングリッシュガーデン、その先にこれからの庭の将来像が見えてくる様に感じているのは私だけだろうか？

図２　恵泉女学園園芸センター蓼科ガーデン